

〈研究メモ〉

西鶴、近松と大阪の近代文学

小林 豊

西鶴と近松は、近世の大阪の風土が産み、育てた大作家であるが、その伝統が大阪出身の近代作家、大阪を描いた近代作家の作品に、どのような形で受け継がれているのだろうか。具体的に検証したいと思つてゐる。以下はそのメ
モ的試論。

大阪的なるものゝは、近松よりも西鶴のほうに色濃く投影してゐる。彼のリアリズムは、大阪出身の宇野浩二・武田麟太郎・織田作之助の小説に受け継がれてゐる、というのが近代文学史の常識である。特に、西鶴を景慕して、代表作『井原西鶴』（昭和十一―十二年）を書いた武田の市井事物は、昭和十年代文学の一つの達成である。市井事物の一つである彼の大阪物、たとえば『釜ヶ崎』（同八年）は、底辺をはい回りながらもたくましく生き抜こうとする下層民の姿を野太いリアリズムで描いた、昭和の名短編の一つだ。昭和大阪の貴重な風俗資料でもある。映画化の話もあった『うどん』（同八年）は、場末の汚ならしいうどん屋の娘と、純情な旧制中学生の「初恋」を描いた短編だが、恋愛の持つ、ロマンチックな香気をわざと切り捨ててゐるところなどは、いかにも西鶴的である。『西鶴町人物雑感』（同九年）というエッセイもある。西鶴譲りの簡潔な文体は、作家の文章として一流である。

旧制三高の後輩であり、その血縁的な弟子ともいえる織田作は、出世作『夫婦善哉』（同十五年）以来、大阪在住の関係もあつて、ほとんどの作品が大阪を舞台にして大阪人を描いたものになつてゐる。そういう点で、近代大阪の産

んだ、最も大阪的な作家といえる。武田が、ある距離を持つて故郷大阪を描いたのに対し、織田は大阪そのものに埋没していた観がある。『夫婦善哉』は、あまりにも有名だが、『放浪』（同十五年）が最も西鶴的ではないか。泉州生まれの一人の庶民の流転の半生を描いたこの作品の哀憐は、不可解な性の欲望に駆られて、半ば盲目的に各地を放浪する、西鶴小説の主人公の哀憐に通じるものはないだろうか。彼にもまた『西鶴新論』（同十七年）なる評論がある。

宇野は、武田や織田ほど西鶴に傾倒してはいないが、その粘っこいリアリズムは、やはり、西鶴的だ。『十間路地』（大正十四年）は、明治三十年代と思われる宗右衛門の路地に住む風変わりな人々を描いたものである。西鶴も好んで変わった人々を描いた。というよりは、人間の戯画化を好んだ。宇野は、そういう点でも西鶴に通じる。『楽世家等』（昭和十三年）は、食い意地の張った、いかにも大阪人らしい、風変わりな男が主人公になっている。それにしても、大阪を舞台にした小説に、何と多く、食べものが登場することであろうか。作品の題名にもそれが反映している。『うどん』『夫婦善哉』のほかに『鱧の皮』（上司小剣・大正三年）『めし』（林芙美子・昭和二十六年）などの、よく知られた小説がある。これもまた、広い意味での『大阪文学』の特色であろう。

他府県出身で、大阪を舞台に、大阪情緒を描いた作家では、上司小剣を挙げる。（厳密に言えば、宇野も福岡県出身であるが、五歳から二十一歳まで大阪に住んでいるから、大阪出身に数えられてよい。）先出の『鱧の皮』が最も有名だが、西鶴的な影の濃いものでは、『天満宮』（大正三年）がよく知られている。作者の父らしい宮司の情痴が冷徹なリアリズムで描かれている。一体に、この作者には男女間の情痴を好んで描く傾向がある。自然主義系列に数えられる所似であるが、そうしたことや、冷静なリアリズムは西鶴に通じる。もともと、『天満宮』の主な舞台は摂津多田（兵庫県）だが、ここは池田の近くであり、殆ど大阪文化圏に属する。作者はここに育ち、十四歳から二十三歳までの多感な時期を大阪ですごしている。大阪出身の作家に準じてよいのではなからうか。

近松の影響は西鶴に比べるとかなり弱い。第一、西鶴ほど、いわゆる“大阪的”ではない。また彼が劇作家であり、そして近代文学の主流が小説であるからでもあろう。日本の近代文学全体に与えた、両者の影響の差でもある。

ヒステリー女と、それに苦しめられる男を描いた宇野の小説に近松の影を求めるのは無理だろうし、武田は、近松的なものに背を向けたところに、彼の文学的立場があった。少なくとも晩年を除いては——。織田の『夫婦善哉』には、西鶴流のリアリズムの中に、近松風の情緒的な要素が入り混じっている。しっかり者だが、情にもろい蝶子の形象は、近松文学の女性像と重ならないだろうか。これに配する柳吉は、生活力のない、頼りない男である。近松文学の男性像——男主人公にも、世話物に限っていえば「色男、金と力はなかりけり」を地で行くようなものが多い。徳兵衛や治兵衛である。もともと、純情なところは柳吉とだいぶ違う。『のら』なところは『女殺油地獄』の与兵衛にいくらか似ている。『鱧の皮』も、近松や『夫婦善哉』の構図によく似ている。道頓堀のうなぎ屋を切り回す、家付き娘のお文と、家出した道楽者のもこ養子の福造。福造からの手紙にふと、しっかり者の心も動き、好物の鱧の皮を送ってやる。ここには近松の女性の情愛の濃さが垣間見られるかも知れない。治兵衛の女房おさんである。いずれにしても『夫婦善哉』と『鱧の皮』には共通点が多い。前者は、後者の無意識的な影響を受けているのかも知れない。

大阪ことばに「ぼんち」というのがあるが、近松文学の男たちも、いうならば「ぼんち」であろう。この点で、近松文学と『夫婦善哉』、さらにさかのぼって、岩野泡鳴の『ぼんち』（大正二年）、里見弴の『父親』（同九年）は相通じるものがある。そして、この人物形象は、山崎豊子の『ぼんち』（昭和三十四年）に到るだろう。とすればそこに、近松文学の流れが見られるわけだ。ちなみに谷崎潤一郎『春琴抄』（同八年）に『大阪の舊家に育ったぼんちなどは男でさへ芝居に出て来る若旦那そのま、にきやしやで骨細なのがあり……』という一節がある。その谷崎に、近松や西鶴の影が落ちているのか、どうか。彼の作品には、大阪が頻繁に登場することはいうまでもないが、“大阪的”とい

えるかどうか。いえないかも知れない。しかし“上方的”とはいえるかも知れない。しかしそれは“大阪的”とどう違うのか、どう重なるのか。

近松にあこがれた近代作家に、近松秋江がある。徳田という姓をはずして近松の筆名を用いたのは有名なエピソードだが、彼もまた大阪を舞台にした作品をいくつか書いている。いずれも大阪の遊女と作者とのかかりを書いた彼一流の情痴的私小説である。門左衛門文学の特色は、情緒でめんたる男女の愛を描いたところであるが、どうやら彼はそこにあこがれ、自らその主人公たらんと欲したものらしい。住吉公園や文楽座が舞台になっている『青草』（大正三年）もその一つである。青草の上にオシッコをする遊女は、彼にとって小春のような純情可憐な女だったのである。『住吉心中』（同四年）はまだ読んでいないが、近松の影響が容易に想像できる。

明治末から大正初めにかけて、大阪を舞台にした情話文学がよく読まれたらしい。年表を繰ってもその事実は明らかだ。近松の世話物もいわば“情話文学”なのである。書き忘れていたが、上司小剣は『鯉の皮』のほかにも『妾垣——鯉の皮』後編（大正五年）なる小説がある。十五歳の時、行くえ不明になった相思相愛の「お静さん」のことが忘れられず、ずっと操を立てている初老の男の回想。道頓堀を舞台にして甘酸っぱい浪漫情緒が横溢する好短編だ。

「小春治兵衛の芝居の看板」を点景にしているところなど、明らかに近松文学を意識していると見た。『東光院』（同三年）は思いがけなくめぐり会った旧知の男に心を傾けて行く女ごころを老熟した筆で描いている。東光院は大阪近郊のかなり有名な寺らしいが、モデルがいまだに特定できていない。北撰（川西市）に同名の寺があると聞いたが……。泉鏡花の『南地心中』（明治四十五年）も“京阪情話文学”に数えられるのかどうか。元南新地の芸者で、身請けされて、無粋な船場の大商人（大阪人の一典型）の妾になっているお冊と、美少年の手代との無理心中——という趣向は、近松的でもあり、また鏡花的でもある。しかしお冊はいかにも、すっきりと粋な女だ。つまり鏡花的だ。明治

末らしく思われる、宗右衛門町や道頓堀の色町、芝居小屋を背景にした浪華情緒豊かな、そしてまた、優にして秘、艶にして怪なる鏡花の世界でもある、という意味で忘れるわけにはいくまい。

まあ、ざっとこんなところだが、大阪出身の文学者には折口信夫（釈迦空）、川端康成、梶井基次郎、三好達治といった、近松や西鶴と殆ど無縁とも見える叙情派の作家や詩人・歌人もいる。野間宏や高橋和巳、あるいは小野十三郎などの、いわば理知派の作家・詩人も多い。彼らの中に「大阪的もの」はないのかどうか。そういうことを追求する必要はあまりないような気がするのだが……。桑原武夫氏は「詩人は東北、学者は京都」とおっしゃっているが、作家と風土の関係にあまりこだわりすぎるのもどうか、という惑いもある。いずれにしても、昭和に限っていえば「作家は大阪」といえるだろう。